

受験番号

2026年度入試

神戸国際高等学校

# 国語

(2026年2月10日実施、50分、100点満点)

(注意)

- 1 解答用紙と問題冊子の両方に必ず受験番号を記入してください。
- 2 全ての問題に解答してください。
- 3 解答は全て解答用紙に記入してください。記入方法を誤ると得点にはならないので、十分に注意してください。
- 4 試験終了後、解答用紙と問題冊子の両方を提出してください。

□ 次の文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(本文に一部表記を改めたところがあります。)

日本人の人間関係設定において、常に※パーソナルな感情投入が行われて、理性的な仕事による関係自体をパーソナルな感情と分離し得ないということとは、本論においてしばしばaシテキしたところである。

(A) どの社会の人間関係においても、感情的な要素はあるわけであるが、その度合いがっそうひどいということが言えよう。この日本人の性向に対して、アメリカ人の※ビジネス・ライクの「冷たさ」というものは非常にbタイショウ的なものである。日本人は(I)の気が多いというか「甘すぎる」と言えよう。「①坊主憎けりや、袈裟まで憎い」とはいみじくも日本人のこの性質をcショウウチョウしている。坊主と袈裟を分離できないということは、ある意味で致命的な欠点である。そして、これは特に知的な活動においてd著しくあらわれてくる。

まず「②批評精神の欠如」である。ある時、※中村光夫氏が日本における評論家という立場、評論の受け取られ方を嘆いていたが、筆者も全く同感である。作品自体について論じているのにちよつと賞めると「あいつはオレに好感をもっている」ととられ、ちよつとけなすと、「あいつはケシカラン奴だ」とくる。作品をとびこえて、人対人の直接の感情的出来事になってしまう。またごく少数の(これは雨夜の星くらいの割合だが)ものを除いて、評論家、書評家の方でも※往々にして感情的文句を※弄しているのが常である。「これは気に入った」だの、「著者の問題意識を疑う」だの、「著者はまた苦勞が足りない」とか、「著者の周囲の人々がどうだ」などと、作品外の著者の態度とか、人にまで及ぶと同時に、自分の感情投入をさかんに行う。書評というもののスタイル・内容が著者と評者の人間関係でまわってしまふことが多い。はっきり言う、知らない人のもの、自分の反対に立つ人のものに対しては、悪評をするが、知人や仲間、特に先輩のものに対しては、必ずといっていいく

らいほめている。(B)、往々にして(筆者などもついそうなってしまうのだが)、本当に作品の弱点をついた後に起る、いまわしい、パーソナルな感情攻撃をされることを考えると、つい※おぎなりのことを書いてお(II)をにごしてしまいたくなるのである。あるいは始めからeイライを断るしか方法がない。結局、損をするのは第三者である読者であり、③これは大きな社会的マイナスである。書評の信頼度が非常に低いということである。

(中略)

感情が前面に出るということは、人対人の場合のみでなく、国というスケールにおいても行われる。外国から帰って来たり、外国にいて、新たにやって来た日本人に会ったとき、必ずといっていいくらい質問されるのは「対日感情はどうでしょう」である。対日感情なんてあるかもしれないが、そんなことを知っていったい何になるのだろう。第一、ヨソの国では、日本人みたいに一つの感情をもつなんてことはないのだ。この感覚が日本人が国際問題(特に日本との問題に強くあらわれるが)を論ずる場合、非常に入ってくる。具体的なプロセスの分析より、日本はどういう態度をとるべきか、とか、相手の対日本の感情、態度というものに問題が集中される傾向があり、第三者としてあまり学ぶことができないのは残念である。国際問題において読者が欲しいのは、信頼度の高い現実の動きを説明する資料、解説であって、道徳的指標ではない。もし論者自身の判断を強要したのであるなら、論理的な(感情的でない)証明がなければならぬ。

論理性の欠如は、日本人の会話というものにもよくあらわれている。だいたい日本人の会話には、スタイルとして※弁証法的発展がないことである。話者間の人間関係によってだいたい初めから終りまで形式がきまってしまうっており、※お説頂戴式の一方通行であるか、平行線をたどり、ぐるぐるまわりして、結局はじめと同じところにいるという場合が多い。これは人間関係というものが先にのべたように、「※タテ」につながらり、同列、同質に立つということがないということに大いに関係があると思われる。※テーゼに対する※アンチテーゼというものは、対等、

対立の関係を前提とする。そして、同様な関係を前提として※ジンテーゼが可能である。この基本的三段階というものが無いから発展がない。言いかえれば「会話」は可能であっても、「ディスカッション」ができないと言えよう。

この批判とディスカッションの例から言えることは、要するに抽象と論理（二つの能力は同一の母体をもっている）を欠いているということができる。（C）、これは人間のもっている資質において、感情に対応するものである。感情は直接的であり、具体的である。人間にとって、また一つの文化にとって、この相反する要素のどちらをのばすこともよいであろう。感情文化は、※エモーションの※デリカシーを生み、その表現として形式を発達させる。たとえば、能におけるように。文学では、※川端、谷崎文学などによって代表されるように、どこの国にもない※ユニークな※ジャンルを発達させている。その一方、構成員、構造力の弱さは、文化のあらゆる分野にみられる。小説、絵画をはじめ、特に音楽、彫刻の発達において、これは大きな弱点である。筆者自身の立場からすれば、④これは社会科学の発達にとって致命的な痛手である。

日本において、自然科学の水準が非常に高いのに対して、社会科学が低いのは、日本人のもつこの特性と非常に関係が深いと思われる。試験管や、数による図式や、モルモットには、いくら感情を投入しても、それは入りえないように、自然科学においてはその研究操作において物理的に感情と理性が分離できているのに対し、社会科学ではあくまで人間が対象になるから、よほどこちらが科学精神に徹していないと、坊主と袈裟を区別できにくくなる。問題意識とか何とかをもつのは結構だが、それによって黒い袈裟の色が赤くなったり、青くなったり、袈裟が坊さんの肉体や精神の一部になったりしては困るのである。（D）、坊さんと袈裟を区別するということは、訓練によって可能なことであるし、日本人の中にも非常に少数ではあるが、それがちゃんとできる人もあるのだから、この点を是非努力して伸ばしていきたいものである。

日本人一般が坊主と袈裟をはっきり分離して考えられるようになり、職種別組合というものが本当に成立するようになったら、そのときこそ、

※ソーシャル・ストラクチュアも変るのであると思う。それほど、体質改善がなされなくても、少しでもそうした部分がふえていくことが可能であるならば、それにこしたことはないと思うのである。

（中根 千枝 『タテ社会と現代日本』）

※パーソナル：個人の。個人的な。

※ビジネス・ライク：事務的、実務的。

※中村光夫：著名な文芸評論家。

※往々：そうなることがしばしばあるさま。

※弄する：思うままにあやつる。

※おざなり：誠意のない、その場限りの間に合わせであること。

※弁証法・テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ：対立する意見（テーゼとアンチテーゼ）を議論や対話を通じて統合し、より高次元の新しい

結論（ジンテーゼ）を生み出す思考法。

※お説頂戴：お説拝聴とも。目上の方の意見や話をありがたく聞くということ。

※タテ：順番や権力などでたてに並び、組み合わせさせた人間関係。筆者が本文中で使っている語。

※エモーション：感情。

※デリカシー：気くばり。細かな配慮。感情や感覚がこまやかなこと。

※川端、谷崎：いずれも日本の著名な文学者。小説家。

※ユニーク：独特なさま。

※ジャンル：種類。芸術、とくに文芸作品の種類。

※ソーシャル・ストラクチュア：社会の構造。

問1 ll a k e のカタカナの語を漢字で、漢字の語はその読みをひらがなで答えなさい。

問2 (I)・(II)に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問3 (A) (D)に入る適当なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア そして    イ すなわち    ウ しかし    エ もちろん

問4 ①「坊主憎けりや、袈裟まで憎い」は慣用句で、「袈裟」は僧侶の衣服のことです。この慣用句の意味を、「ある人」という言葉を使って説明しなさい。

問5 ②「批評精神の欠如」とありますが、「書評」はどのようなものになってしまっているのでしょうか。本文中の語を用いて五十字以内で説明しなさい。

問6 ③「これは大きな社会的マイナスである。」とはどういうことですか。次の文の空欄に入る語句を十字以内で答えなさい。

読者は( )  
と( )  
( )を読むことができない

問7 ④「これは社会科学の発達にとって致命的な痛手である」とありますが、筆者はどうしてこう言うのですか。次のア～エから適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 具体的に直接的な感情的側面が発達していることよって、芸術的な形式が広がったから。

イ 感情と理性が分離できていることが自然科学には有利に働いたが、社会科学には不利に働くから。

ウ 日本人に論理性が乏しいということが、客観性を必要とする科学的行為全てにおいて弱点となるから。

エ 社会科学は人間を扱う学問であるので、感情と理性を分離するこ

とが非常に難しくなるから。

問8 本文の内容と合致するものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人はどんなことにも感情投入する特性を持ったため、仕事と感情を切り放すことが全くできない。

イ 日本人は感情のままに話を組み立てるので、会話もディスカッションもうまくすることができない。

ウ 日本人は国際問題において対日感情を気にしがちであるが、海外では感情はあまり問題にならない。

エ 日本人は好き嫌いの感情をうまく使いこなせさえすれば、社会の形も変えることができる。

二 次の方を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(本文に一部表記を改めたところがあります。)

主人公の「さやか」は二十歳でアルバイトをしている。中学時代不登校で、中学の卒業証書を受け取らなかったため、アルバイトの履歴書に学歴を書くことができなかった。あるとき夜間中学という中学があることを知り、夜間中学校に通うことになる。そこには、時代や経済状況のために中学で学べなかったお年寄りや、外国人が通っていた。ある日、「さやか」は「※識字クラス」でお年寄りたちがひらがなを一生懸命学んでいるところを目撃する。その続きの場面である。

「先生、今日もありがとうございます」

「はい、お疲れさま。気を付けて帰ってくださいね。」

午後九時過ぎ、無事に授業を終え、夜間中学の生徒たちは、疲れながらも晴れやかな顔つきで校門を出ていく。

そのまま夜勤の仕事に向かう者も居れば、家路につく者も居る。さやかは、遠見と正子※ハルモニ、車椅子の介助者として、駅へと向かっていた。

「そうか、江口先生とそないな話をなあ」

吐息交じりに、遠見は呟く。

何処となく元気がないさやかを気遣い、遠見から何かあったか、と問われた。思い切って※スアンを迎えにいった先で見た光景、江口先生との遣り取りを打ち明けたさやかであった。

「わしも正子ハルモニも、識字から始めたよって、そらあ、大変やった。最初に教わったんが『つ』『く』『し』やったから、まだ何とかなかった。けど、①あれが『あ』やったら、とうにくじけてるやろ」

なあ、正子ハルモニ、と同意を求めて、遠見は切なげに瞬きをした。「※中国残留孤児やった落子さんは、それでも十歳までは日本語の教育を受けてはったよって、進級も早かったけど、わしは……」

ゼロから始めてここまで来るのに六年かかった、と苦しげに遠見は話す。

「私は七年。七年かかったんよ」

柔らかに、正子ハルモニが口を開いた。

「aそれでも奇跡に近い、と思える。何せ、読むことも書くことも、どつちも全く適わなかったんやからねえ」

正子ハルモニの言葉に、車椅子を押していた介助者が深く頷いていた。

飲食店、ドラッグストア、金融業、コンビニエンスストア、等々。駅周辺の繁華街には、電飾で縁取られた看板が林立し、文字が②洪水のように押し寄せる。

「bこんなに文字が氾濫しているのに……」

読めなかったら。

書けなかったら。

そんなん、想像も出来へん、という台詞を、さやかはぐっと呑み込んだ。

皆の歩みがc自然に、遅くなる。

ポケットに、と遠見が自分の上着のポケットに手を入れてみせた。

「ポケットに、いっつも包帯を入れてたんや」

「包帯を？何で？」

さやかに問われて、遠見は③気弱な笑みを浮かべる。

「仕事場でも役場でも何処でも、何かを『書け』と言われてそうになると、手に怪我した振りして、誰ぞに代わりに書いてもらうためやがな」

遠見がポケットから手を出した。その掌に、丸められた包帯が見えるようだった。

私は、と正子ハルモニが声を低める。

「私は眼鏡やった。よう眼鏡を忘れた振りをしたんよ。代わりに読んでもらうためにねえ」

——これが、現実なんよ

江口先生の言葉が、その表情が脳裡にdありありと蘇る。

——文字を読めない、書けない。そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷な人生を強いたのか

もしも、字が読めへんかったら……

書けへんかったら……

それが私やったら……

④足もどが、大きくぐらりと崩れるような錯覚に襲われて、さやかは両の足を踏ん張った。そうしなければ、立ってはいらなかった。

駅の改札前で遠見と別れ、車椅子の正子ハルモニと介助者と一緒に、プラットホームに向かう。

さやかは押し黙ったままだった。

何か用事を思い出したのだろう、介助者がホーム端の公衆電話を指して、

「ちよつと電話をかけてきます。少しだけ待っててもらえますか」と断ってから、車椅子を離れた。

ラッシュアワーを過ぎたホームは静かで、次の電車を待つひと、まばらだった。さやかは車椅子のハンドルに手を添えて、正子の隣りに立っていた。

駅名標、路線図、駅構内図、「終日禁煙」を始めとする標識、行先案内、等々。駅のホームには、大切な情報を記した表示が一杯あった。

もしも、一文字も読めないとしたら……。

蒸し暑い夜のはずが、背筋がぞくぞくと寒く、さやかは身震いをした。

さやかちゃん、と正子ハルモニは傍らのさやかを見上げる。

「朝鮮から無理やり日本に連れて来られた時、私は十二歳やったんだよ」

母国語の※ハングルの読み書きさえ、充分に出来なかった。

※女工から始めて、働きに働いてねえ、と正子ハルモニは自身の手に視線を落とす。変形した指の関節、節が高く、長年の苦勞が刻まれた手だった。

さやかは相手の目の高さよりも低くなるよう、車椅子の傍らに腰を落とした。

正子ハルモニは、淡々と続ける。

「読み書きを覚えたくても、『お前に字いなんぞ要らん。働け』と。皆、そない言うてねえ。一遍も学校へ行かせてもらわれへんかった」

戦争が終わって、縁あって結婚し、家族にも恵まれた。

「字い知らんでも、生きてはいける。けどねえ、子どもの通信簿もよう読んでやれんかったんよ。娘の不思議そうな、悲しそうな顔は、何十年経ったかて、忘れられへん」

当時を思い出すのか、⑤老女の声が湿りけを帯びていた。

「文字を知らんから、何遍も騙されて。家も財産も全部、持っていかけたこともあったわ」

今なら相談する窓口もあるだろうが、当時は泣き寝入りするほかなかつたのだという。

「そんな……ひどい……」

かける言葉も見つからず、さやかは声を失するよりなかった。

友の受けた理不尽を我が身に置き換え、俯くばかりのさやかに、正子ハルモニはそっと手を差し伸べる。

「せやけどねえ、さやかちゃん」

友の皺だらけの手が、さやかの手をそっと掴んだ。

「夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはできへんの」  
正子ハルモニの一言に、さやかは⑥不意を突かれる。  
ホームに、電車が到着する合図の音楽が流れて来た。

「お待たせして済みません」

詫びながら、介助者が車椅子に駆け寄る。

「ほな、さやかちゃん、お休み。また明日、学校でね」

掌にぐっと力を込めてから、正子ハルモニは、さやかの手を放した。

介助者と車椅子の同級生が乗車した電車が、ホームを滑り出る。遠ざかって闇に紛れたあとも、さやかはホームに佇んでいた。

友の温もりが、握る手に込められた力が、まださやかの掌に残る。

学校はおろか、文字さえも与えられなかった正子ハルモニ。

何もかも与えられながら、それを当然としか思わなかった自分。

——夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことができへん

んのお・お・ぞ・ら

正子ハルモニの言葉に、識字クラスの授業風景が重なる。

ああ、とさやかは思う。

ああ、そうか、と。

『学び』とは、誰にも奪われないものを自分の中に蓄える、ということなのか。

誰のためでもない、自分のために。

自分の人生のために。

「強いなあ、強いわ、ほんまに」

思わず、声に出していた。

それに比べて、自分は何と「あかんたれ」なんやろか。

血を吐く思いで自分の中に蓄えたものなど、何一つないように思う。

全て、当然のものとして受け取ってきた。

強くありたい。強くなりたい。

⑦正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐっと拳に握りしめていた。

た。

た。

※識字：…文字の読み書きができること。

※ハルモニ：…韓国語でおばあさんという意味。

※スアン：…さやかか友人の名前。

※中国残留孤児：…第二次世界大戦の終戦時、旧満州に取り残された日本人の子どもたち。

※ハングル：…韓国語。

※女工：…明治時代から、第二次世界大戦頃まで、主に製糸工場や織物工場などで働いた女性労働者。

問1 —①「あれが『あ』やったら、とうにくじけてるやろ」とありますが、これはどうしてですか。本文中の語句を用いて三十字以内で説明しなさい。

問2 || a「それでも」、b「こんな」、c「自然に」、d「ありあり」との品詞を次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 形容詞    イ 形容動詞    ウ 副詞  
エ 連体詞    オ 接続詞

問3 —②「洪水のように」に用いられている表現技法の名前を漢字で答えなさい。

問4 —③「気弱な笑み」とありますが、ここからどんな心情が読み取れますか。適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 後ろめたさ    イ 恥ずかしさ

問5 —④「足もとが、大きくぐらりと崩れるような錯覚に襲われて」の説明として適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分にとって普通のことの当たり前のものではないことに気が付き、強い衝撃を受けた。

イ 過酷な人生を送った級友に思いを寄せ、現代社会の理不尽さに強い怒りをつのらせた。

ウ 級友と同じ学校に通う自分の人生がどうなってしまうのかと想像し、大きな恐怖を感じた。

エ 自分のいる世界がうそで作られたものであることに気付く周りの大人に不信感を抱いた。

問6 —⑤「老女の声は湿りけを帯びていた」とありますが、これはどういうことですか。四十五字以内で答えなさい。

問7 —⑥「不意」とありますが、この言葉の意味を答えなさい。

問8 —⑦「正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐつと拳に握りしめていた」とありますが、ここで「さやか」はどのようなことを決意したと考えられるか、「正子ハルモニのように」の後に続くように、五十字以内で答えなさい。

〔三〕 次の文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。（本文に一部表記を改めたところがあります。）

八つになりし年、父に問ひていはく、「仏は①いかなるものに※かさうらふらん」と言ふ。父がいはく、「仏には人のなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として仏にはなり※さうらふらん」と。父また、「②仏の教へによりてなるなり」と答ふ。また問ふ、「教へさうらひける仏をば、何が③教へさうらひける」と。また答ふ。「それもまた、先の仏の教へによりてなりたまふなり」と。また問ふ、「その教へ始めさうらひける第一の仏は、いかなる仏に④かさうらひける」と言ふとき、父、「空よりや⑤降りけん、土よりやわきけん」と言ひて、笑ふ。「⑥問ひつめられて、え答へずなりはべりつ」と、諸人に語りて※興じき。

『徒然草』

※かさうらふらん||さうらふやらん…:いざいませうか。

※興じき…:おもしろがった。

問1 | ③「教へさうらひける」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問2 | ④「か」に係る、結びの語を抜き出し、活用形を答えなさい。

問3 | ①・②の意味を答えなさい。

問4 | ⑤「降りけん」とありますが、何が降るのですか。本文中から抜き出して答えなさい。

問5 | ⑥「問ひつめられて、え答へずなりはべりつ」について、後の問いに答えなさい。

i 誰が言ったのですか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 諸人    イ 父    ウ 筆者    エ 仏

ii 「え答へずなりはべりつ」の訳として、適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア お答えになることになったのでした。

イ うまく答えることがおできになりました。

ウ お答えになるはずではなかったのです。

エ 答えることができなくなりました。

問6 この文章の内容として適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 我が子がかわいくてたまらず、我が子を人に自慢したい父親の心情が描かれている。

イ 物心がつき始めたころの追究する癖によって、父親を困らせてしまったときの思い出が描かれている。

ウ 仏の存在を疑うことによって、真の学問が生まれてくるものだという教えが描かれている。

エ 我が子の無邪気な問いかけの返答にこまっている父親の姿が描かれている。

問7 本文は『徒然草』である。作者名とジャンル名をそれぞれ漢字で答えなさい。